吉田遺跡第１次
発掘調査報告

１９８９

財団法人 東大阪市文化財協会

例　　言

1．本書は、大阪府住宅供給公社が予定している吉田府営住宅建設に伴って実施した吉田遺跡の試掘調査報告書である。

2．調査は、東大阪市教育委員会の依頼を受けて、財団法人東大阪市文化財協会が大阪府住宅供給公社の委託を受けて実施した。

3．調査は、財団法人東大阪市文化財協会福永信雄を担当とし、本書の作成は福永が、遺物実測及び整図は津田美智子、奥村正美が行った。

4．検出した中世の水田土壌の花粉分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行なった。

5．調査の実施にあたって、大阪府建築部住宅建設課、大阪府住宅供給公社から多大な協力を得、大阪府教育委員会文化財保護課中井貞夫・久米雅雄氏よりは、調査について有益な指導・助言を得た。また、調査にあたって、岩野英明、大庭正義、永吉清道、上村忠則、中野善典、遠藤里香等の参加を得た。記して心より謝意を表する。

目　　次

Ⅰ．はじめに……1
Ⅱ．位置と環境……2
Ⅲ．調査概要……4
　1．調査方法と目的……4
　2．調査経過……4
Ⅳ．遺跡……6
　1．層序……6
　2．遺構……13
Ⅴ．出土遺物……15
Ⅵ．吉田府営住宅建設に伴う試掘調査によって採取した土壌の花粉分析報告……18
Ⅶ．まとめ……22
　写真図版……23～28

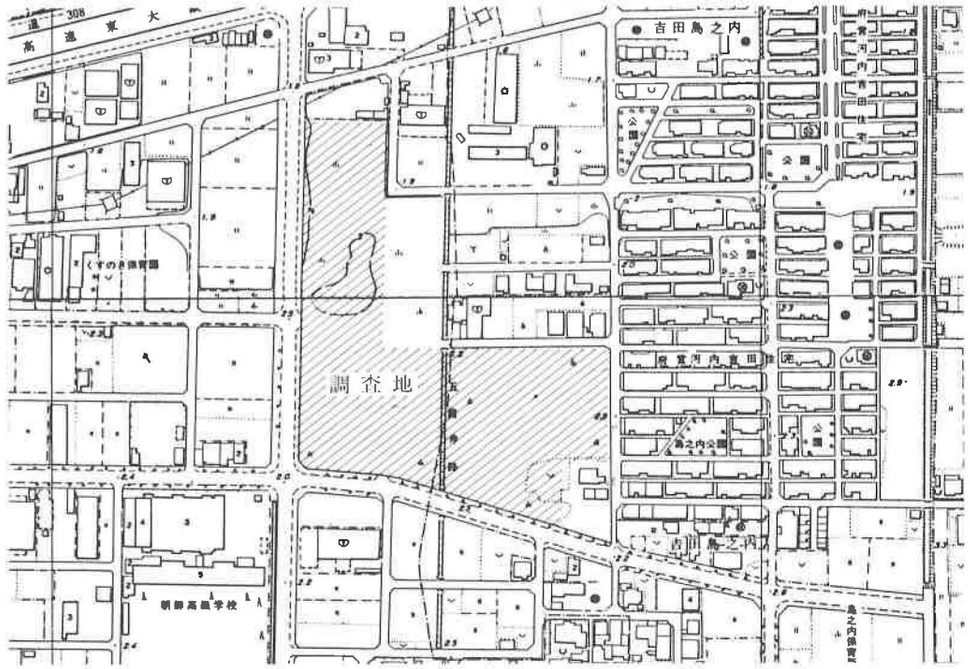
Ⅰ．はじめに

大阪府住宅供給公社は、東大阪市吉田島ノ内98－5番地他において府営住宅の建築を計画された。計画地は、弥生時代以降旧河内湖の縁辺にあたる地と考えられている場所で従前、遺跡として周知されている場所ではなかった。しかし、開発面積が約30,000㎡と大規模であり、計画地の東約300ｍに水走遺跡、南約700ｍに稲葉遺跡が最近あいついで地下深くより発見されていることから未知の遺跡の存在する可能性も考えられた。

そこで、大阪府教育委員会では、遺跡の有無を確認するための試掘調査を事前に実施するよう大阪府住宅供給公社に対し指導され、これの実施を東大阪市教育委員会に要請された。東大阪市教育委員会では、調査方法等を大阪府教育委員会と協議の上、調査の実施を本協会に依頼されることとなった。本協会は、これを受けて大阪府住宅供給公社と試掘調査の委託契約を結び、昭和63年４月18日より６月22日まで現場調査を実施した。その後、出土遺物などの整理を平成元年３月31日まで実施した。

試掘調査の結果、後述するように、計画地の東半分で中世の水田と畦畔を検出し水田遺構が存在することが明らかとなり、地名を取り吉田遺跡として今後周知していくこととなった。以下、本報告でも吉田遺跡と呼称する。

本来表題を試掘調査報告とすべきであるかも知れないが、上記のように遺跡として周知するようになったため、１次調査と称して報告することとした。



第１図　調査地位置図

II．位置と環境

吉田遺跡は、河内平野のほぼ中央、現在の地名では東大阪市島ノ内に所在する。国土地理院発行の1/25000の地形図「大阪東北部」では、右下端付近にあたる。現状は西半分が区画整理の実施された空地となり、東半分は木造の大阪府営住宅が建つ。この付近は、先頃までT.P１ｍ前後の低湿な水田地帯であったが、最近大規模な区画整理事業が行なわれ様相が一変した。

遺跡の北側には、国道308号線が走りその上に近畿日本鉄道「生駒線」が近年開通した。区画整理が進み鉄道が開通したことから、市域で今後最も開発が進むと予想される地域である。

宝永元年（1704年）の大和川付替以前、旧大和川の主流の一つである玉串川は現在の柏原市・八尾市を北流して近畿日本鉄道奈良線「花園」駅付近で東西二つに分流し、東側は吉田川、西側は菱江川となって弥生時代に存在した湖「河内湖」の後身である深野池・新開池に注いでいた。本遺跡は玉串川の分流する地点の北約1.5km、両川の自然堤防の後背地に位置する。

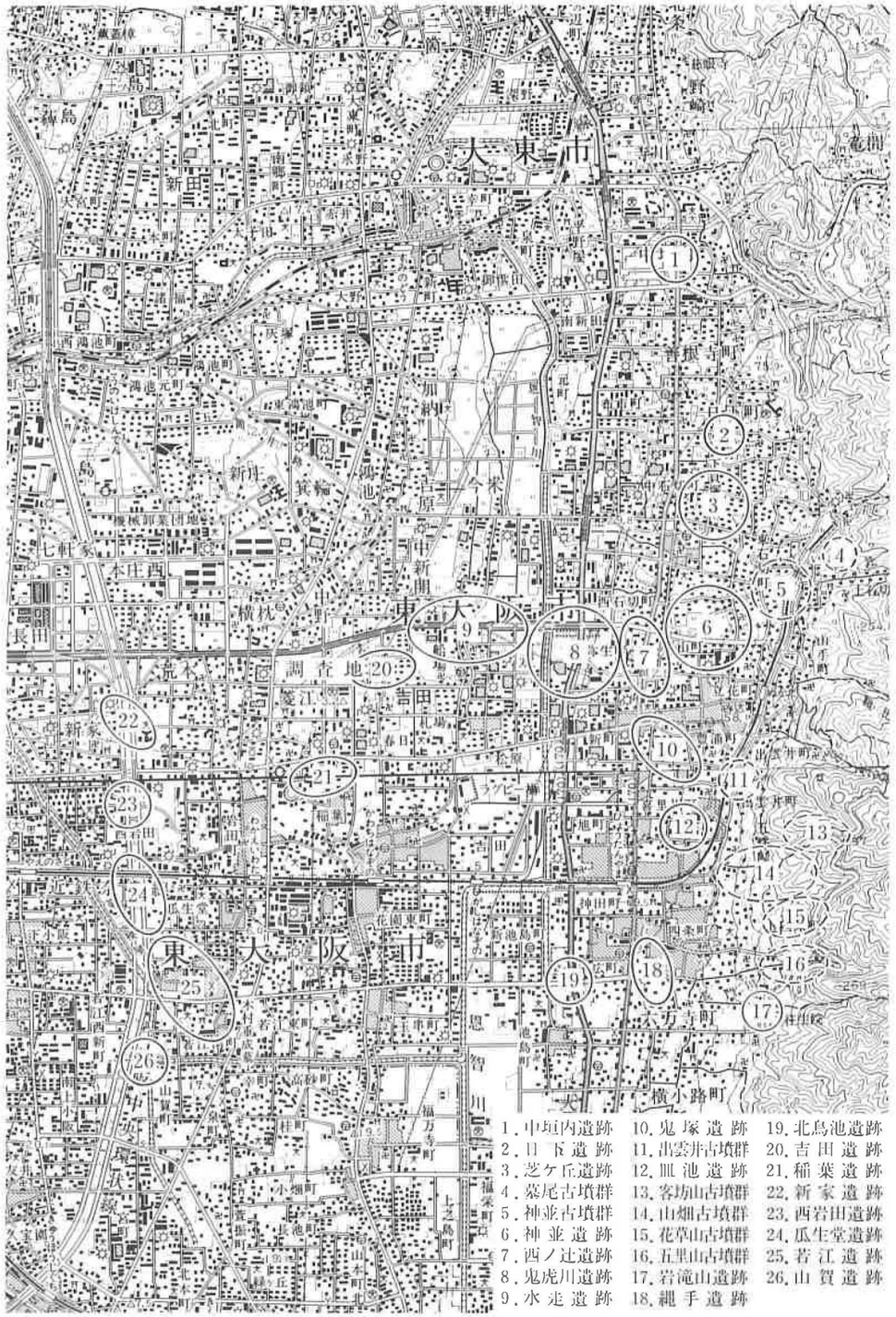
この付近は、若江郡と河内郡の郡界にあたり、荻田昭次氏の河内郡・若江郡条里の研究[注(1)]によれば、今回の調査地のほぼ中央を南北に流れる水路「五箇井路」が郡界となっている。もとよりこの郡界が、奈良時代にまでさか上るかどうかは不明ながら、江戸時代以前のある時期から存在したことはまちがいない。江戸時代の本遺跡付近には、吉田川の自然堤防上に今米村・吉田村、菱江川の自然堤防上に菱江村・稲葉村などが存在した。当時、今回の調査地の若江郡に入る場所は菱江村、河内郡に入る場所は吉田村に属していた。

本遺跡の南0.8km、玉串川の分流地点の北側に稲葉遺跡（弥生時代～中世）、東0.8km吉田川の東岸の自然堤防上に水走遺跡（縄文時代～中世）が所在する。旧河内湖の縁辺にあたる地域であるため、旧石器時代から中世まで各時代の遺跡の存在する山麓部や、内陸部の楠根川沿いの地域などに比して遺跡の分布は密でない。特に菱江川と吉田川に挟まれた地域では、現在の所、稲葉遺跡が存在するにすぎない。稲葉遺跡の報告[注(2)]された調査成果にもとづき、本遺跡付近の土地利用の状況を簡単にふれておきたい。

稲葉遺跡は、調査地内及び周辺で弥生時代前期より中期後半まで集落が存在したことが判明している。その後、後背湿地となり古墳時代中期末から後期初頭までの短期間に水田の存在が想定され、以降平安時代後期まで、時に水田として利用されながら氾濫原と湿原的な環境が交互に繰り返されたようである。平安時代後期（11世紀代～12世紀代）に条里制に規制された地割による水田開発が行なわれ、鎌倉時代（13世紀前半）に洪水によって埋没するまで使用された。その後、室町時代（15世紀後半）に前代と同様の地割をもつ大規模な水田開発が行なわれ現在に続く。江戸時代には畑地も存在した。

吉田川や菱江川の流路は、13世紀前半以降に形成されたものである。荻田氏が指摘された郡界にあたる井路は、中世の自然河川の東肩部分に重なるとのことである。

稲葉遺跡の変遷は、立地からみて、本遺跡の推移を考える上で、重要である。両遺跡とも、玉串川の氾濫におびやかされながらも、各時代の人々が耕地化の努力を続けた所といえよう。



第２図　周辺遺跡分布図(1/50000)

Ⅲ．調査概要

１．調査方法と目的

今回の試掘対象地は、すでに区画整理が実施された南北に長辺をもつ「L」字形の土地で幅約６ｍの道路により、４つのブロックに画されていた。そこで、各ブロックを北よりＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ地区と仮称した。前述した郡界の五箇井路は、Ｃ・Ｄ地区の西端近くを南北に流れる。

調査は大阪府教育委員会の指導を受け、各地区の中央付近に１箇所ずつ平面５×５ｍの範囲に鋼矢板を打設し、この付近の地山が存在する現地表面下５ｍまで、盛土を除きすべて人力で掘り下げて調査を行なうトレンチ４箇所と、機械と人力を併用して平面４×５ｍの素掘りトレンチを26箇所以上、任意に設定して実施する計画で当初調査を開始した。しかし、盛土が予想以上に厚かったのと土層にもあまり大きな変化が認められなかったことから、素掘りトレンチに関しては平面を10×９ｍに拡大し計21箇所のトレンチを設定して実施した。素掘りトレンチも盛土は機械で掘削したが、以下は一部の深掘りを除き人力で掘り下げた。各トレンチは調査を実施した順に、第１～第25トレンチと呼称した。

今回の調査の目的は、従前遺跡が周知されていなかった対象地において遺跡の存在の有無を確認することを第一とし、次いで弥生時代以降河内湖の縁辺にあたっていたと考えられる場所がどのような自然環境の変遷を経て現在に至っているのかを、確認することとした。

対象地周辺の河内湖縁辺と考えられる地で、最近相次いで発見された稲葉遺跡・水走遺跡などとの比較も目的の一つとした。

２．調査経過

現場調査は、昭和63年４月18日に資材を搬入し、翌日から開始した。遺構・遺物の検出も少なかったことから同時併行で３ないし４箇所のトレンチの調査を行なった。以下、主要な調査経過を列記する。

４月26日　第１トレンチ第５層（上部砂層）中より瓦器・土師器の細片出土、この砂層が中世以降の洪水によるものと判明。

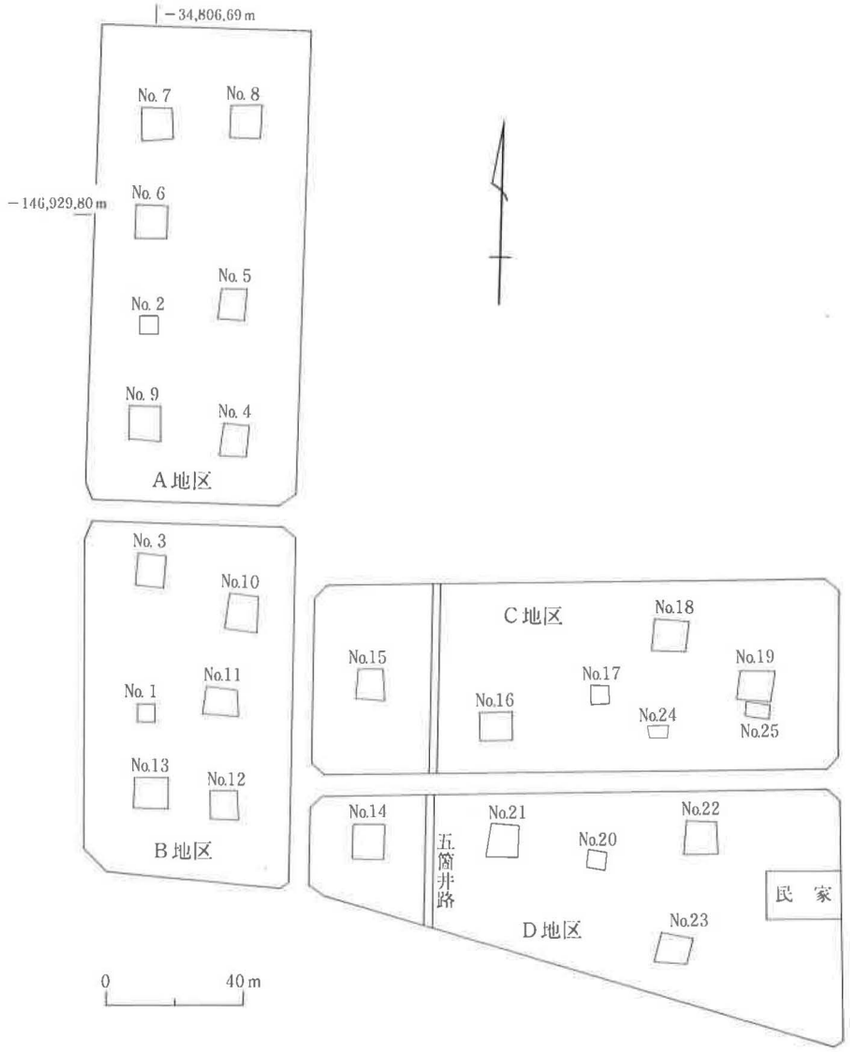
４月28日　第４トレンチで第５層の下面、第６層（暗青灰色シルト混り粘土）上面に不鮮明な足跡検出。人間の歩いた跡であることは確認できる。

５月６日　第５トレンチの第６層中より瓦器（13世紀前半）の細片１点出土。同層中よりシジミなどの貝も出土。中世の沼状の堆積と考えられる。

５月24日　第６トレンチ第９層（下部砂層）の下面、第10層（黒色粘土）上面で、イノシシ・シカなどの動物のものと思われる７cm×５cm前後の足跡を検出。黒色粘土中には、アシなどの植物遺存体多数含まれる。第９層中より摩滅した須恵器と土師器の細片出土。

６月14日　第13トレンチより噴砂検出。寒川旭氏の教示により、1510年の地震による可能性が高いことがわかる。

６月16日　第21トレンチの第５層下面より、東西方向の畦畔１条を検出。水田面にも人と思



第３図　トレンチ位置図

われる足跡多数存在する。ヘラ状木製品も１点出土。

６月17日　大阪府教育委員会文化財保護課の中井係長、久米技師が調査状況を視察に来訪され、畦畔の検出状況から調査地の東半分を中心に水田遺跡として周知するよう指導を受ける。

６月21・22日　第22トレンチ第５層中より完形に復元できる瓦器椀１点（図14）出土。

６月22日　第21トレンチの断面より水田の畦畔等の花粉分析用サンプルを採取する。その後保存のため、水田面にグランドシートを敷き、遺物取り上げ済の砂を用いて埋めもどしを行ない、現場を撤収する。

Ⅳ．遺跡

１．層序

調査対象地は、約30000m²と広大であったが、堆積環境が安定した低湿地ということからいくつかのトレンチ間で少し異なった層序も認められたが、大きくみれば、極端な変化は少なかった。そこで、基本層序を模式化して設定し、説明することにしたい。その後、各トレンチの層序図を掲げるのが、良いのであるが、上述のとおり、ほとんど土層に変化のないものも多い。そのため、紙数の都合もあり、主要なトレンチの断面図を掲載した。

基本層序

第１層　盛土　厚さ1.5ｍ前後である。区画整理にともなって盛られたもので、各トレンチによって厚さに若干の差がある。上面の標高は、T.P2.5ｍ前後である。

第２層　耕土　厚さ10～20cmで、トレンチによっては、盛土をする際に削平を受けて存在しない。第12・13・19トレンチでは、上下２層に分層できた。

第３層　暗灰色砂質粘土（床土）厚さ40cm前後で稲の根に伴うとみられる鉄分の沈着が認められる。第12・13トレンチより、近世から近代の瓦・陶磁器の小片出土。

第４層　暗黄灰色粘土　厚さ30～40cmで第３層と同じく鉄分沈着が認められる。第12トレンチでは、上面に落ち込みが認められた。

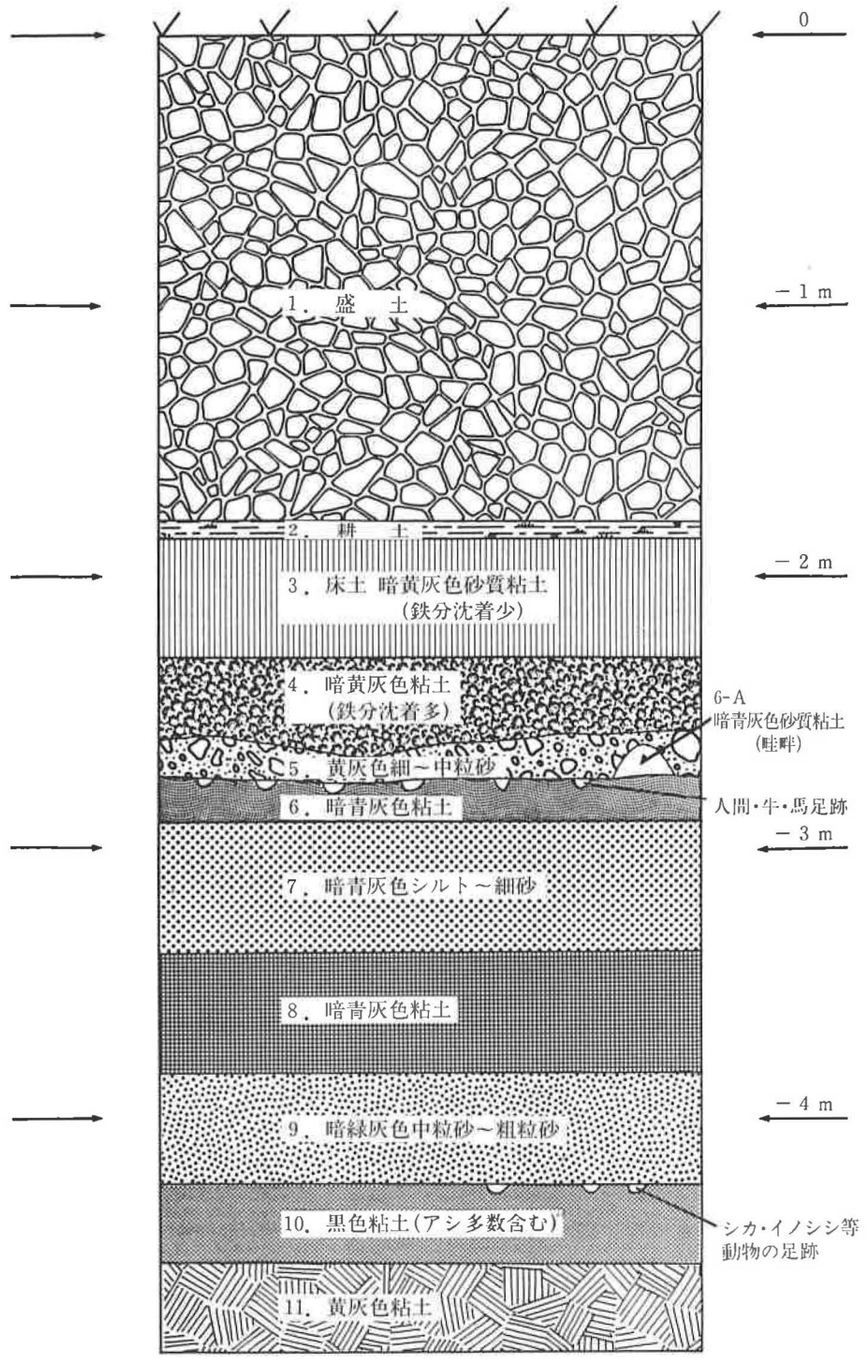
第５層　黄灰色細砂から中粒砂（上部砂層）Ａ・Ｂ地区で厚さ32～88cm、Ｃ・Ｄ地区で厚さ28cm～100cmである。第７・12・15トレンチでは存在しない。第６・８トレンチで北東の肩を、第10・11トレンチで南東の肩を検出。Ｃ・Ｄ地区の第16・18トレンチなどでは、厚さ４cm前後の暗青灰色シルト質粘土が間層として１ないし２層認められた。土師器の細片と13世紀前半から中葉に属す瓦器椀出土。Ａ・Ｂ地区とＣ・Ｄ地区の砂層とも出土遺物などからみて相似た時期に洪水によって堆積したものと考えられる。

第６層　暗青灰色粘土　厚さ30～50cm前後、Ａ・Ｂ地区ではシルト質粘土になるトレンチ（第１・２・５・４）も認められた。シジミなどの貝を含む。上面の標高はT.P０ｍ前後で第１トレンチのみT.P－0.3ｍである。第１・13・16トレンチでは、この層の下に第９層の下部砂層が存在する。第21トレンチのこの層の上面で、畦畔及び足跡を検出した。足跡は、他のトレンチでも認められた。13世紀前半に属す瓦器椀の小片１点出土。

第６－Ａ層　暗青灰色砂質粘土　第21トレンチで畦畔を成す土層である。遺構の項で詳述する。

第７層　青灰色シルト～細砂　厚さ20～60cm。Ｂ地区には、第10トレンチを除いて存在せず、シルトから細砂層に変わり、第13トレンチでは噴砂（ふきあげ）となって第５層まで貫入している。またＡ地区は、貝を少量含む緑灰色粘土に変る。

第８層　暗青灰色粘土　厚さ12～40cm。Ａ地区第５・６・８・９トレンチ、Ｂ地区第10トレンチ、Ｃ地区第17・19トレンチに存在し、Ｄ地区では第23トレンチなどに存在する。



第４図　基本層序模式図

貝や植物遺存体を中量含む。

第９層　暗黄灰色細砂から中粒砂　厚さ28～80cm。すべてのトレンチに存在するが、色調はＡ地区が、暗黄灰色～黄灰色、Ｂ地区青灰色～暗青灰色、Ｃ地区・Ｄ地区が灰白色と変化する。層厚は、Ｃ・Ｄ地区で厚く、砂の粒子も粗い。これは、東から西に向って砂が堆積したことを示しており、玉串川の前身の河川による氾濫によって堆積したと考えられる。土師器・須恵器の細片が出土した。須恵器は、７世紀前半に属するものがある。

第10層　黒色粘土　厚さ24～64cm。上面の標高は、Ａ・Ｂ地区の境でT.P－1.4ｍとやや凹み他はT.P－１～1.2ｍ前後で、ゆるやかな起伏をもつ。多量のアシなどの植物遺存体含む上面でシカ・イノシシなどの動物のものと思われる足跡を検出した。Ｃ地区の第18・19・25トレンチは、貝を含む暗灰色シルト質粘土が存在し、下層は、ヒシの実を多量に含む暗緑灰色細砂である。この３トレンチ付近に、黒色粘土を切って河川が存在したことを示している。

第11層　黄灰色粘土　厚さ150cm以上。平野部で通有の地山層である。上面の標高は、T.P－1.7ｍ前後で、ほぼ平坦と考えられる。アシなどの植物遺存体は、第10層に比して少ないが、上部には少量認められ下部ほど見られなくなる。

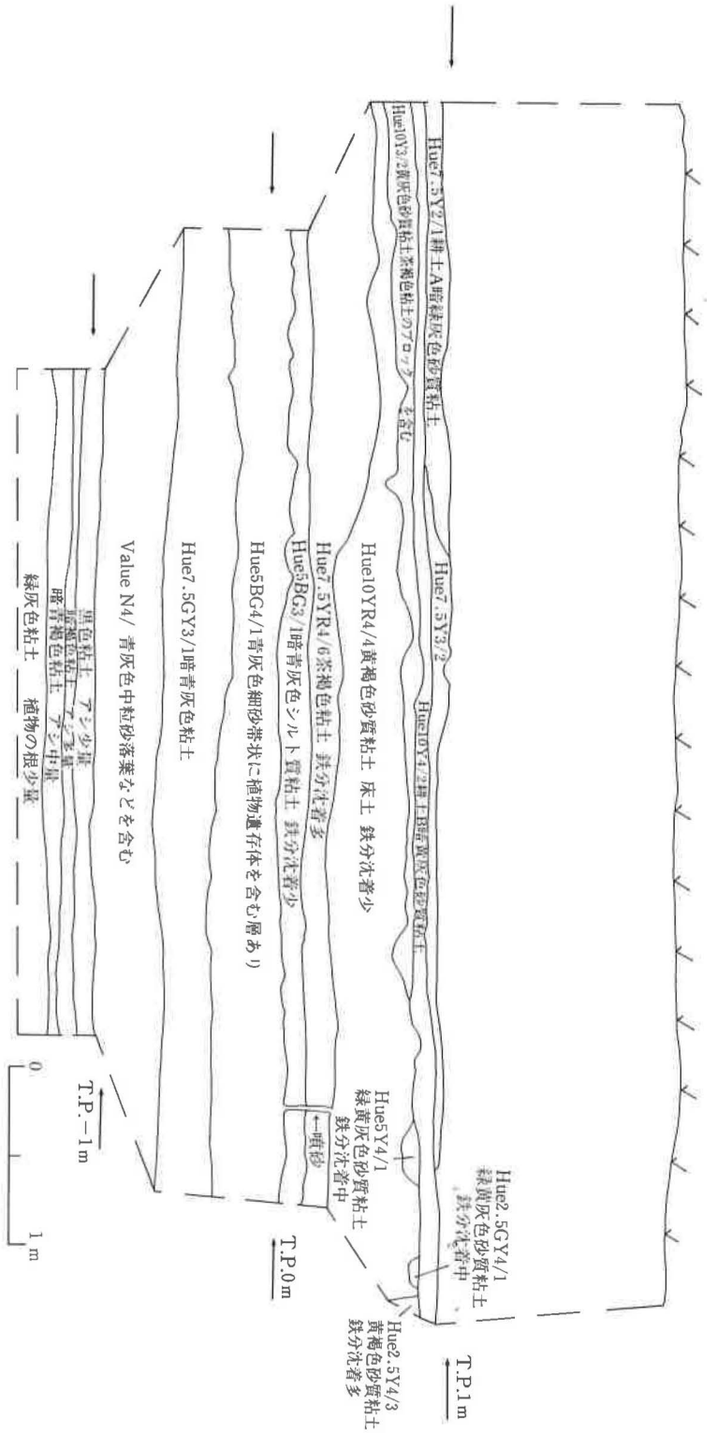
各層の所属時期は、出土遺物などからみて、第３層が近世～近代、第４層中世～近世、第５層鎌倉時代（13世紀前半～中葉）、第６層鎌倉時代（13世紀前半）、第７・８層奈良時代から平安時代、第９層古墳時代後期末（７世紀前半）、第10層弥生時代前期から古墳時代後期、第11層縄文時代晩期末と考えられる。

注

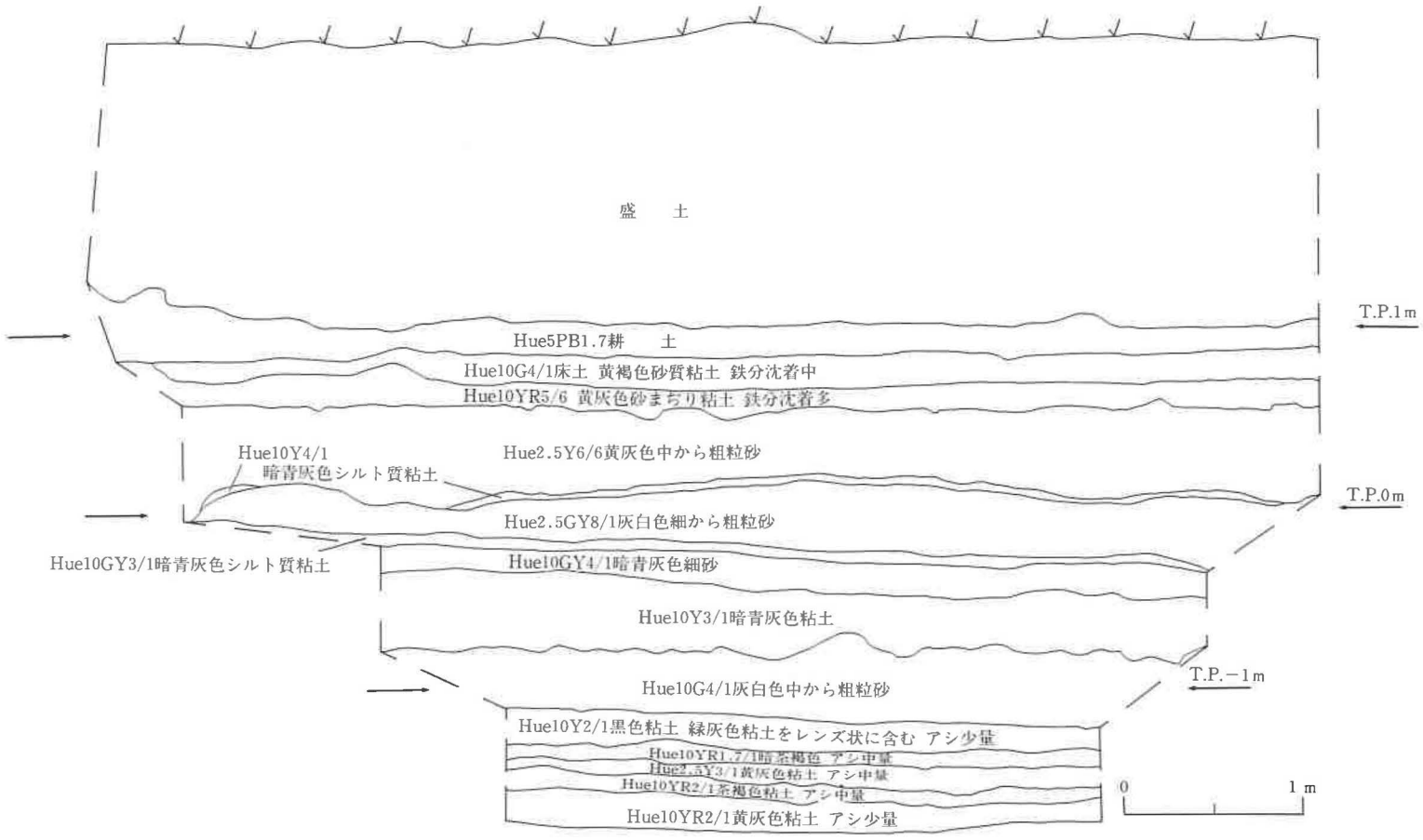
(1)　荻田昭次（1973）「河内郡・若江郡条里の復元」『池島町の条里遺構』東大阪市遺跡保護調査会　P17～29

(2)　中井貞夫他（1986）『稲葉遺跡発掘調査概要・Ｉ』大阪府教育委員会

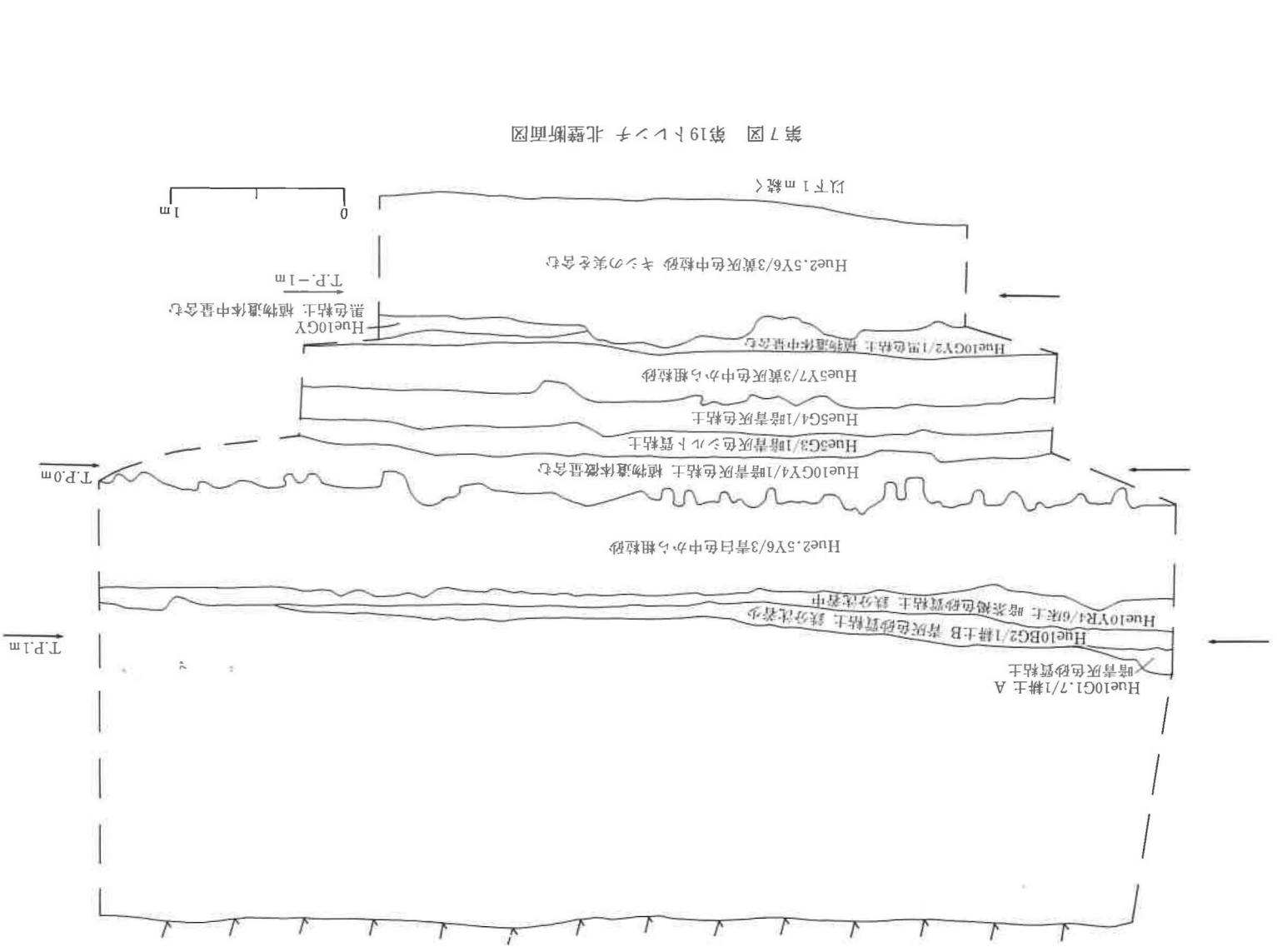
(3)　通商産業省地質調査所寒川旭氏の御教示を得た。記して謝意を表する。



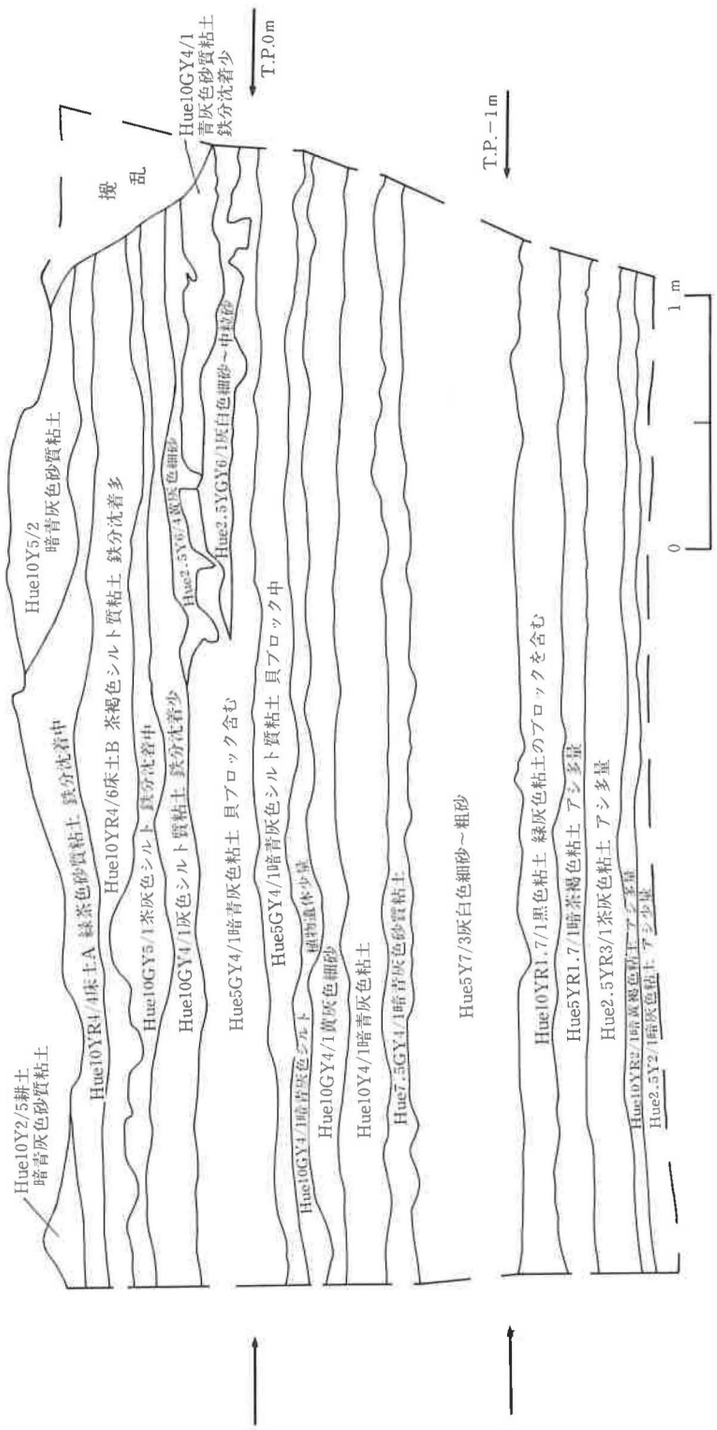
第５図　第13トレンチ　北壁断面図



第６図　第16トレンチ 北壁断面図



第７図　第19トレンチ 北壁断面図



第8図　第20トレンチ　北壁断面図

2．遺構

今回の調査で検出した遺構は多くない。溜池・溝・畦畔である。溜池は、近世～近代にかけてのもので、第18トレンチで一画を検出した。遺構ではないが、自然河川の肩を第６・第８・第10トレンチで確認している。また足跡も、第６層上面で不鮮明なものも含めほぼ全てのトレンチで検出し、第６トレンチなどでは第10層上面にシカ・イノシシ・トリと考えられる足跡も検出した。

以下、明確な遺構として検出された、第15トレンチと第21トレンチについて記述する。

第15トレンチ

溝２条を第４層の青灰色シルト質粘土上面で検出した。溝は２条とも東西方向に走るものである。溝１は、幅１ｍ、深さ0.2ｍで長さ5.2ｍ以上をはかる。トレンチの北半で検出した。断面は、隅丸の逆台形を呈する。底面の標高は西端でT.P0.16ｍ東端で0.14ｍで西から東にゆるく流れるようである。溝内の堆積土は、黄灰色シルトで、鉄分の沈着が少量認められる。

溝２は、トレンチのほぼ中央、溝１の南肩より約0.4ｍ離れて検出された。幅0.5ｍ、深さ0.12ｍ、長さ5.2ｍ以上をはかる。断面は逆台形を呈する。底面の標高は西端でT.P0.18ｍ、東端でT.P0.16ｍで溝１と同じく西から東にゆるやかに流れる。溝内の堆積土は溝１と同じで同時に埋没したものと思われる。検出した層からみて中世から近世にかけての耕作用の溝と考えられる。

なお、トレンチの南西端で、これらの溝より切り込み面からみて新しい（近世）と考えられる落ち込み１を検出した。長軸３ｍ以上、短軸0.8ｍ以上で堆積土は二層に分かれ、上層は鉄分沈着の多い茶褐色砂質粘土で、下層は緑灰色砂質土である。

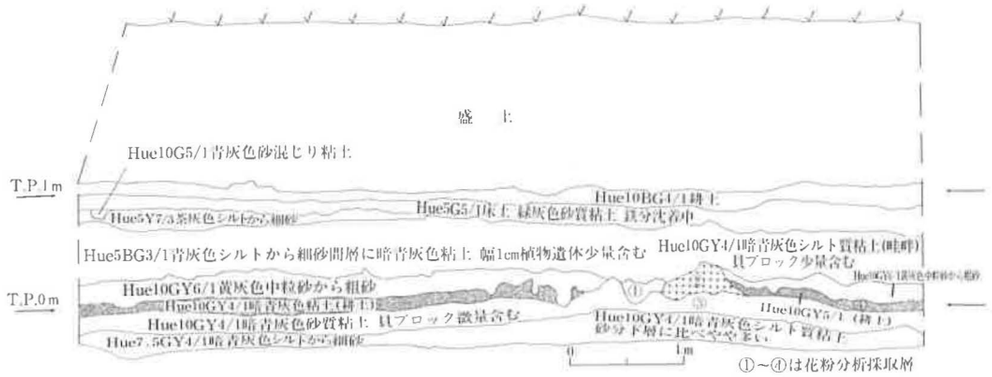
これらの遺構からは遺物はまったく出土しなかった。

第21トレンチ

畦畔１条と足跡を検出した。畦畔は、トレンチの北よりにほぼ東西に横切る形で存在する。下幅0.8ｍ、上幅0.24ｍ、高さ0.28ｍの断面は台形を呈するしっかりしたものである。最上部は西よりにあり、標高T.P30cmで東に向うほど低くなり標高T.P10cmである。畦畔を構成する土は、第６層の暗青灰色粘土と第７層暗青灰色シルトを盛り上げたものと考えられ、暗青灰色シルト質粘土である。第６層に含まれる貝のブロックも少量みられる。畦畔の北側には足跡が認められたが、南側には存在しない。

耕土は、第６層の上面に厚さ12cmの暗青灰色粘土層が認められた。第５層は、耕土上を覆っている。耕土上面に足跡が多数認められた。足跡は、明瞭なものではないが大きさからみて人間のものが多いようである。少数は、大きさからみて牛あるいは馬と考えられるものも存在した。水田の上面の標高は、T.P８～10cm前後であり、畦畔より南側の方が僅かに高い。耕土中より杓子状木製品１点が出土した。

畦畔及び水田の時期は、第５層が13世紀前半と考えられることからほぼ同時期と思われる。上層で、畦畔が検出されていないことから、上記の時期に短期間水田として利用されたものの玉串川の氾濫によって埋没したため、中世末から近世に至るまで、耕作地として利用されなかったものと考えられる。



第９図　第21トレンチ 西壁断面実測図

第10図　第21トレンチ 畦畔・足跡平面図

Ⅴ．出土遺物

前述したように、本遺跡は水田址であるため出土遺物は多くない。完形に復元できたのは、図14～16の瓦器椀だけで他は細片である。図化できたもののほとんどを掲載した。遺物の内訳は、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦と杓子状木製品がある。他に植物遺存体としてヒシの実や木ノ実も出土した。以下、種類別に出土トレンチと検出層を付記して解説する。

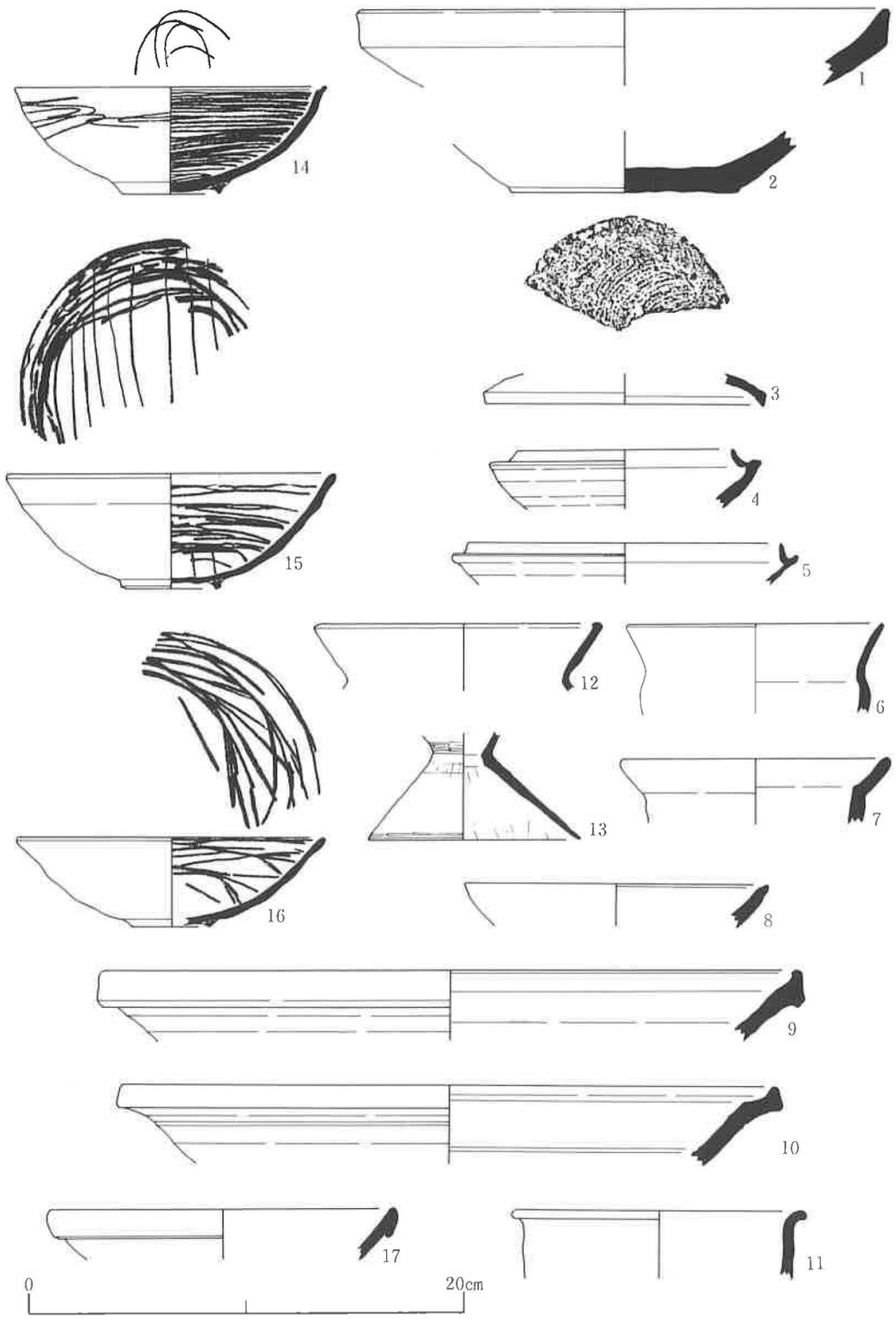
土師器（図６・８・12・13）図12は、甕の口縁部である。口径13.2cmで口縁端部を内側に肥厚させる。胎土に長石・金雲母を含み内面は橙色、外面はにぶい橙色を呈する。第５トレンチ第５層出土。図６は、小型丸底壺の口縁部から体部にかけての細片である。口径は11.7cmで調整は摩滅の為不明。胎土に１mm以下の長石・金雲母などを含む。内面は橙色、外面は黒斑の為黒褐色を呈する。第16トレンチ第５層出土。図13は、小型器台の脚部と杯部の一部を残すものである。脚部は「ハ」の字形に開き、裾端部は丸くおさめる。裾部径は9.7cm、同高さは4.8cmで脚部外面は横方向のハケ、杯部外面は横方向のヘラミガキで調整する。胎土に金雲母などを含む。内面はにぶい黄褐色、外面は黒褐色を呈する。第８トレンチ第９層出土。図８は、杯の口縁部である。口径13.9cmで口縁端部内面に１条の沈線をめぐらす。調整は摩滅の為不明。胎土に１mm以下の長石・金雲母・くさり礫などを含む。第４トレンチ第５層出土。

図６・12・13は布留式土器で、古墳時代前期（４世紀代）に、図８は、古墳時代後期（６世紀後半）に形態からみて属すものである。

須恵器（図２～５・９）図２・９は、東播系の練鉢である。図２は底部片で底径10.4cm、底部外面には、静止糸切痕が残る。胎土はやや粗く雲母・長石などを含む。内面は煤けて暗赤褐色、外面は淡赤橙色を呈す。第12トレンチ第３層出土。図９は、口縁部片で口径31.8cm、口縁端部を上下にわずかに拡張する。胎土はやや粗く金雲母と白・黒色の砂粒を含む。色調は灰白色を呈する。表採資料。図３は杯蓋の口縁部である。口径12.7cmで、口縁端部はわずかに上下に拡張し角ばって終る。焼成は良好で胎土に長石などを少量含む。色調は灰白色を呈する。第21トレンチ第５層出土。図４・５は、杯身の口縁部である。口径は9.8cm(図４）14.3cm(図５）で、２点ともたちあがりは、矮小化しており、受部は外上方にのびる。焼成は良好で少量の長石などを含む。内外面とも灰色を呈し、摩滅している。図４は第19トレンチ第５層出土。図５は第６トレンチ第９層出土。

図４・５は陶邑編年のTK209～TK217型式に属し、古墳時代後期末（７世紀前半)、図３は同じくMT21型式に属し飛鳥時代（７世紀後半）に属すと考えられる。

瓦器（図１・７・14～16）図14は、口縁端部内面に１条の沈線をめぐらす「大和型」の瓦器椀である。口径14.3cm、高さ4.9cm、底径4.4cmである。高台断面は三角形で体部内面に密なミガキ、見込部に粗い連続圏線状ミガキを施す。体部外面上半にも分割性の残るミガキがみられる。胎土に、微細な長石・金雲母を含む。内外面とも暗灰色を呈する。第22トレンチ第５層出土。図15・16は「和泉型」の瓦器椀である。図15は口径15.0cm、高さ5.3cm、底径4.1cmで高台



第11図　出土遺物実測図

断面は逆台形を呈する。見込部に８条の平行線状ミガキを施す。胎土に、微細な金雲母などを含み、色調は内外面とも黒灰色を呈する。第19トレンチ第５層出土。図16は、口径14.1cm、高さ4.1cm、底径3.6cmで、高台断面は三角形を呈する。体部内面に粗いミガキを施す。胎土に微細な長石・金雲母などを含み、内外面とも灰色を呈する。第12トレンチ第３層出土。図１は、擂鉢の口縁部で口径24.2cmである。胎土に２～３mm前後の長石を含み、内外面とも灰黒色を呈するが、摩滅が激しい。第12トレンチ第３層出土。図７は、土管の口縁部である。口径22.2cmで、内外面とも灰黒色を呈するが、やや摩滅がみられる。第21トレンチ第３層出土。

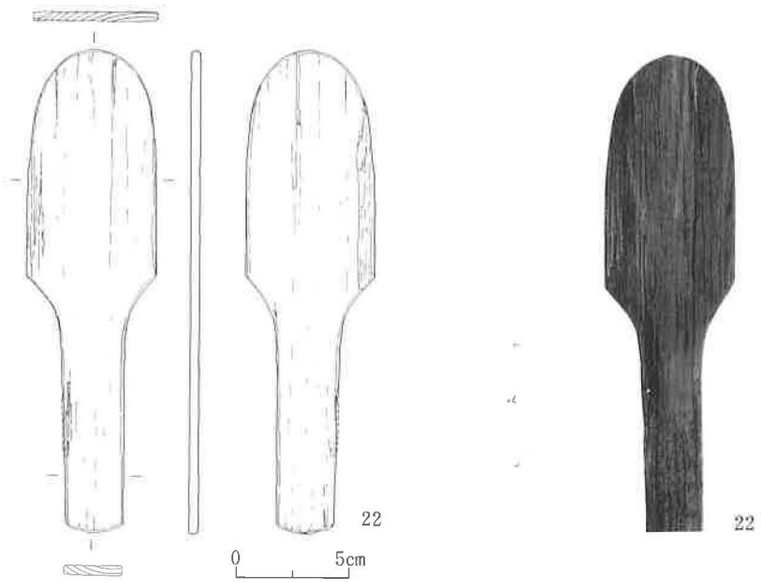
図14は鎌倉時代（13世紀前半～中葉）図15は鎌倉時代（12世紀後半～13世紀前半）、図16は鎌倉時代（13世紀前半～中葉）図１は室町時代末期（16世紀後半）、図７は江戸時代に属す。

陶磁器（図10・11・17）図10は、唐津系の鉢の口縁部で口径30.0cmである。第11トレンチ第３層出土。図11は唐津系の椀の口縁部で、口径13.1cmである。内外面に緑黄色の釉がかかる。第21トレンチ第３層出土。図17は、白磁碗の口縁部で口径15.7cmである。内外面に灰白色の釉がかかる。中国からの輸入品である。第８トレンチ第３層出土。

図10・11は江戸時代（17～18世紀）図17は平安～鎌倉時代（12世紀後半）に属す。他に江戸時代（18世紀代）の見込部を釉はぎした伊万里系の染付碗が２・３層より少量出土している。

木製品　杓子状木製品の完形品が１点（図22）出土した。長さ21.2cm、幅5.7cm、厚さ0.4cmのものである。縦木取りで作られ、ていねいな削りを施すがノミ痕はみられない。市内出土の類例は、若江遺跡に有る。第21トレンチの13世紀前半と考えられる水田耕土中より出土。

遺物は、室町時代末期から江戸時代以降のものを除くと大半は砂層内よりの出土で、摩滅したものも多く流れ込みによって遺跡内に埋没したものと考えられる。



第12図　杓子状木製品実測図・写真

Ⅵ．吉田府営住宅建設に伴う試掘調査によって採取した土壌の花粉分析報告

１．試料および目的

試料は、吉田府営住宅建設に伴う試掘調査にともなって採取された土壌４点（No.１～４）である（表１）。これら４点の試料のうち、No.１・２・４は中世（鎌倉～南北朝）の水田とされる部分より採取されており、No.１が水田耕土，No.２が畦畔，No.４が床土に相当する。No.３はこの水田の下位にみられた貝化石を含む自然層から採取されたものである。今回の分析は、試料中に含まれている花粉・胞子化石の種類構成を明かにすることで、この水田における稲作の様態について検討することを主目的とした。

２．方法

試料の秤量（湿重13ｇ）、フッ化水素酸処理→重液分離→アセトリシス処理→水酸化カリウム処理の順に物理・化学処理を行い、花粉・胞子化石を抽出する。抽出残渣をグリセリンで封入し、プレパラートを作成し、光学顕微鏡下でその全面を観察し、種類（Taxa）の同定・計数を行った。また検出されたイネ科花粉については、ノマルスキー微分干渉装置を使用し、表面の模様を観察し、大きさ・発芽孔の形態なども考慮しながらイネ属と他のイネ科に区別した。

３．結果および考察

結果は、表１に示した。花粉・胞子化石が良好に検出されたNo.３・４については、花粉化石群集分布図を作成した（表２）。出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子から不明花粉総数を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で算出した。

(1)化石の産状について

花粉・胞子化石の産状は、以下の通りである。水田耕土とされるNo.１ではシダ類胞子化石が多産したが、検出された花粉化石は少なく外膜が壊れている（薄くなっている）ものを含んでいた。畦畔部分とされるNo.２では、花粉・胞子化石ともに少なく、僅かに検出された化石のほとんどは、外膜が壊れているものであった。一方、床土とされるNo.４とその下位の自然層No.３では、化石が良好に検出された。

このような各試料における花粉・胞子化石の産状および保存の違いは、堆積当時の微地形・堆積環境や堆積後の続成作用の違いに起因すると考えられる。花粉化石は、好気的な環境では化学的に酸化分解し、また土壌微生物（糸状菌・放線菌・細菌など）によっても分解することが知られている。No.２は畦畔堆積物とされることから、水田耕土に比較して好気的な環境にあったとも言える。そうだとすれば、No.２で化石が少ないのは、土壌微生物や化学的に分解したことを意味していることが推測される。また、水田耕土とされるNo.１で花粉化石のみ少なかった点は、畦畔より保存され易い環境にあったことが想像されるものの、堆積物中における花粉・胞子の分解過程に関する研究も少なく、現状ではどの程度の分解の作用を受けたかなどについて究明するのは困難である。今後の研究課題である。

(2)稲作について

栽培植物とされるイネ属花粉は、自然層とされるNo.３で2.9%、耕土とされるNo.４で13%検出された。鈴木・中村（1977）は、現在の水田表層堆積物のイネ属の産状について調査を行い、花粉分析の結果イネ属比率（総イネ科花粉数に対するイネ属の比率）が30%以上を示す層準では周辺で稲作が行われていたと見なしてよいと考えている。今回の分析結果について、この見解に基づいて検討を行う。No.３の自然層では、イネ属の出現率は低く、またイネ属比率も20%と低いことから、当時、稲作農耕が行われていた可能性は低いと判断される。現水田耕土では、耕作等の人為的な撹乱によって花粉が下方に移動するとされていることから（鈴木・中村，1977）、自然層とされるNo.３より検出されたイネ属花粉も上位の水田耕作等に伴う撹乱によって下方移動し、二次的に堆積した化石である可能性もある。ただし、ここで検出されたイネ属が全て撹乱によって堆積したものであるとも断定はできない。現水田耕土の調査によれば、散布されたイネ花粉の残存率は散布地点で100分の１程度で、その多くが水田外に流出・堆積することが指摘されている（鈴木・中村，1977）ことから、同層堆積当時調査地点周辺の稲作が行われていた地点から流出した花粉が本地点に運搬・堆積した可能性も考えられるのである。いずれにせよ、本層の堆積時期などを含めた検討作業が必要となろう。また、本試料からは畑作植物であるソバ属花粉が検出されているが、直上のNo.１からも検出されている。イネ属花粉と同様に上層から移動してきた可能性と、堆積当時周辺で栽培されていた可能性の両者が考えられる。

No.４の水田耕土では、イネ属の出現率が高率になり、イネ属比率も45%を示すようになる。また、カヤツリグサ科などは減少する。これらのことから、本地点において稲作が行われていた可能性が高いと判断される。また、自然層の頃に多かったカヤツリグサ科などが減少することは、稲作に代表される本地点近辺の開発が進行した状況を示唆するとも考えられる。また、随伴する水湿地性のイボクサ属・ミズアオイ属は、近年まで水田雑草として良く知られた種類であることから、当時も水田雑草として生育していたことが想像される。

なお、No.４・３の木本花粉の組成がほぼ類似していることから、周辺の台地上の植生はほとんど変化せず、照葉樹のカシ類などを主とする林が成立していたものと考えられる。また、マツ属・コナラ亜属などは二次林を構成する種類であること、遺跡内で水田耕作が行われていたことなどから、中世（鎌倉～南北朝）の頃の遺跡周辺では自然に対して人類の干渉が及んでいた可能性が推測される。周辺の台地上には、マツ属・コナラ亜属などが二次林として生育していた可能性が強い。

引用文献

鈴木功夫・中村　純（1977）稲科花粉の堆積に関す基礎的研究．文部省科研費特定研「古文化財」「稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究－中間報告－」（中村　純編），p.1-10.

種 類(Taxa)	試料番号 1	2	3	4
木 本 花 粉				
モミ属	1	-	5	5
ツガ属	1	-	6	4
トウヒ属	-	-	2	2
マツ属	1	-	35	28
コウヤマキ属	4	-	6	4
スギ属	2	2	24	26
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	3	-	7	27
ヤナギ属	-	-	1	2
クルミ属	-	-	2	1
クマシデ属－アサダ属	2	-	3	18
ハシバミ属	1	2	2	-
カバノキ属	-	-	1	1
ハンノキ属	1	-	7	5
ブナ属	1	-	4	3
コナラ亜属	7	-	24	15
アカガシ亜属	18	-	77	55
クリ属－シイノキ属	6	2	14	17
ニレ属－ケヤキ属	1	-	1	8
エノキ属－ムクノキ属	-	-	1	10
シキミ属	-	-	1	-
アカメガシワ属	-	-	-	1
トチノキ属	-	-	1	-
ウコギ科	-	-	1	1
ツツジ科	-	-	-	1
カキ属	-	-	1	-
イボタノキ属	-	-	1	-
トネリコ属	-	-	-	1
草 本 花 粉				
オモダカ属	1	-	-	-
イネ属	-	-	15	60
他のイネ科	18	1	60	72
カヤツリグサ科	4	3	137	38
イボクサ属	-	-	-	1
ミズアオイ属	-	-	-	2
クワ科	-	-	1	7
サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	-	2	1
ソバ属	1	-	1	-
アカザ科	-	-	1	1
ナデシコ科	1	-	1	-
キンポウゲ科	1	-	2	1
バラ科	-	-	-	1
マメ科	-	-	-	1
アリノトウグサ属	1	-	1	-
セリ科	2	-	1	1
シソ科	-	-	1	-
オナモミ属	-	1	-	-
ヨモギ属	10	-	21	16
キク亜科	-	1	1	-
タンポポ亜科	1	-	-	1
不明花粉	3	1	3	5
シ ダ 類 胞 子				
シダ類胞子	165	18	48	22
Botryococcus近似種	-	-	5	-
合 計				
木本花粉	49	6	227	235
草本花粉	40	6	245	203
不明花粉	3	1	3	5
シダ類胞子	165	18	48	22
総花粉・胞子	257	31	523	465

表1　吉田府営住宅建設に伴う試掘調査採取土壌における花粉分析結果

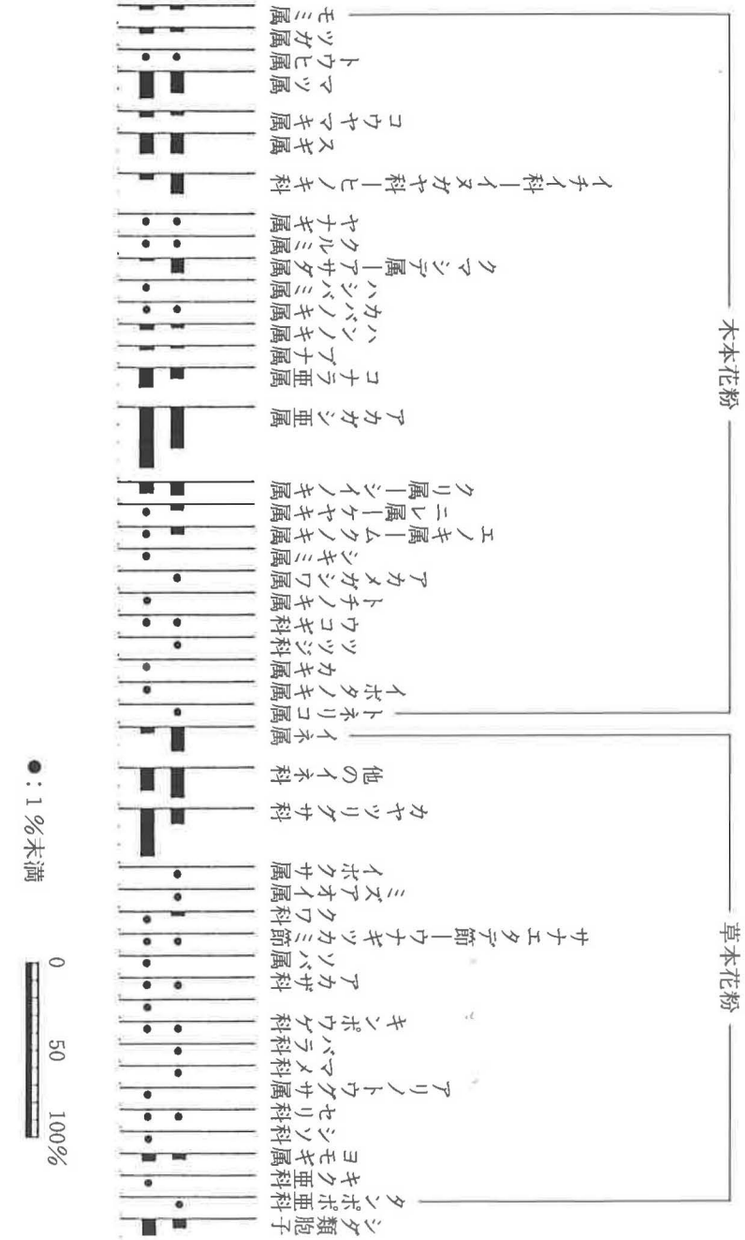


表2　吉田府営住宅建設に伴う試掘調査採取土壌における花粉化石群集の分布

Ⅶ. まとめ

今回の調査で明らかになった点を以下、列記してまとめとしたい。

1　調査地は従前、遺跡とされていなかったが第21トレンチで畦畔の一画を検出し、鎌倉時代後期（13世紀前半）の水田址が存在することが明らかとなり吉田遺跡として今後、周知することとなった。

2　調査を通じて、当該地の弥生時代以降の推移が明らかになった。弥生時代は、河内湖の縁辺にあたる地でシカ・イノシシ・トリなどの動物が歩き回るアシの群生した地であった。古墳時代以降奈良時代の間に、玉串川の前身による河川の氾濫に見舞われている。平安時代には、沼地に変わりシジミなどの貝が生息している。南方に所在する稲葉遺跡では、平安時代後期に条里制に規制された地割がおこなわれているが、この地には及んでいない。

鎌倉時代後期（13世紀前半頃）には、第21トレンチ付近に水田が開発されたが、土層の状況からみて長時間存在せず洪水によって埋没している。この洪水は、稲葉遺跡で確認されている洪水層の時期からみて同一の可能性が高い。その後、中世末から近世初めに水田となり、現在に至っている。

3　第21トレンチ検出の畦畔は、試掘調査という性格上、確認範囲が狭いため条里制の地割との関連は不明である。ただ、前述のように奈良時代は水田が存在していないため条里による地割が存在しないのは明らかである。この地が水田に開発されたのは、中世末期以降を除けば鎌倉時代後期の一時期のみと思われる。また洪水によってすぐに放棄されていることや、１ケ所しか畦畔が検出されていないことから、大規模な開発とは考えられない。

4　鎌倉時代後期の水田は、中世に活躍した河内の豪族、水走氏の本拠と考えられる水走遺跡がすぐ東に存在することから、この氏族が開発したと考えて誤りない。また、同時期と考えられる足跡（人、馬ないし牛）を各トレンチで多数、検出した。当時、調査地付近を、人やおそらく耕作に使用したと考えられる牛・馬が歩き回っていたことが明らかである。

5　上記の水田で採取した土壌の花粉分析の結果も稲が栽培されていたことを示している。微量であるが、ソバの花粉が検出されたことは、周辺に畑の存在も考えられ興味深い。

6　第13トレンチで、1510年に起きたと考えられる噴砂が確認された。水走遺跡の例(注1)よりは、小規模なものであるが、今後平野部の遺跡で同様の噴砂が検出される可能性が高い。

7　出土遺物は、古墳時代から江戸時代のものがみられるが、量が少なく細片が多い。出土量は、Ａ・Ｂ地区よりもＣ・Ｄ地区のほうが多い。完形に復元できたのは、瓦器椀のみであった。砂層中よりの出土にもかかわらず、摩滅もみられず水田の存在と相まって近くに集落の存在も予想される。

注

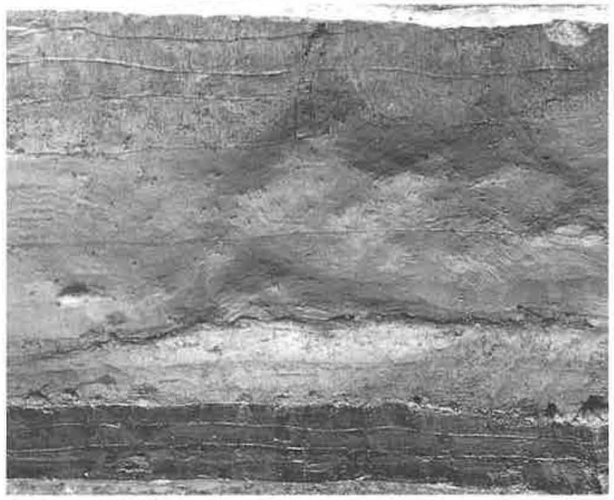
(1)勝田邦夫（1988）「水走遺跡にみられる地震の痕跡」『東大阪市文化財協会ニュース３巻３号』Ｐ25～28

図版1

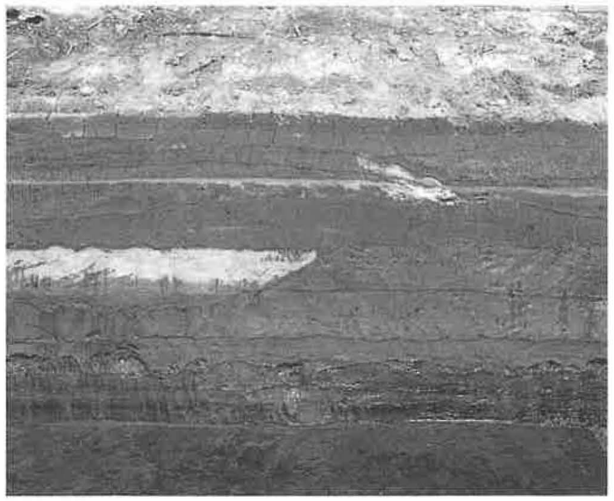
調査地全景（航空写真）

図版2

1．第7トレンチ 完掘状況

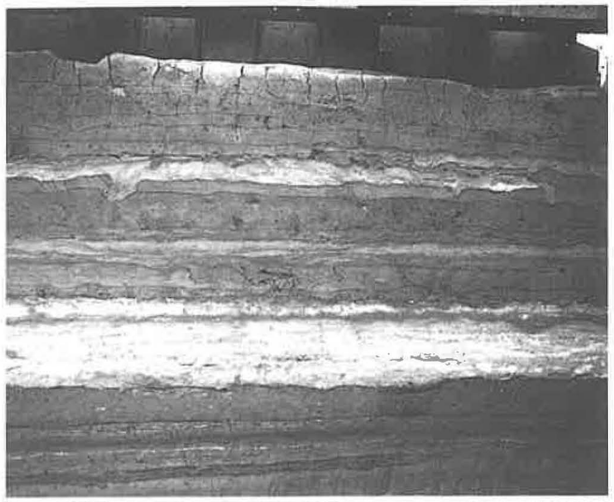


2．第7トレンチ 東壁断面

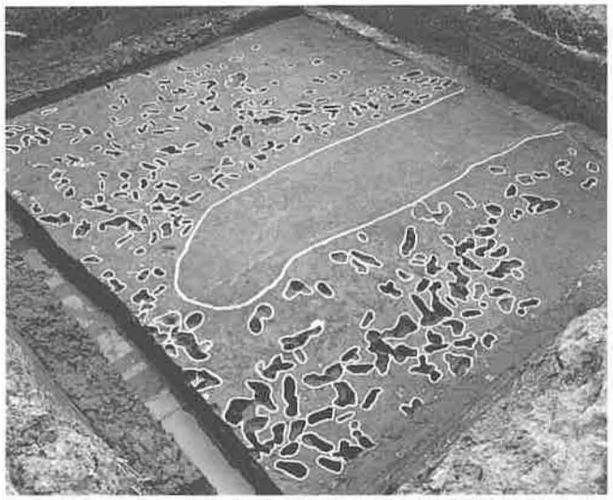


3．第8トレンチ 東壁断面

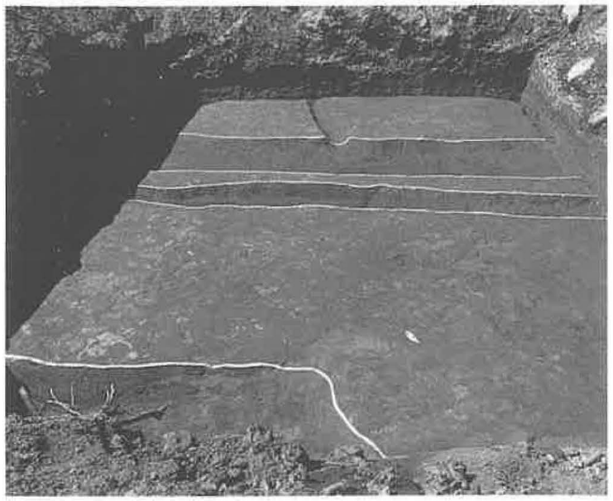
図版3



4．第20トレンチ 東壁断面



5．第21トレンチ 畦畔検出状況
（鎌倉時代後期）

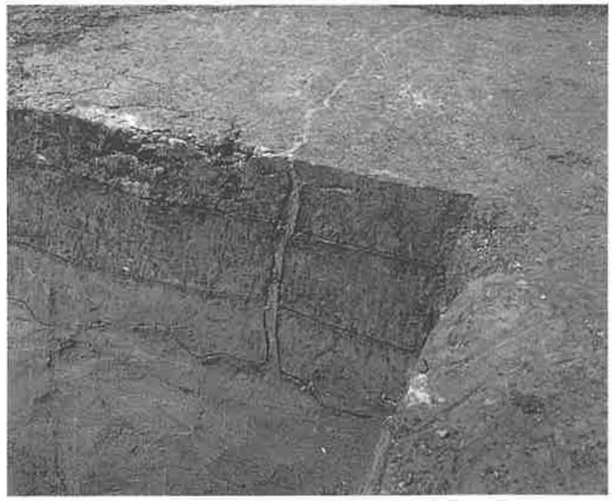


6．第15トレンチ 耕作用溝
（近世～近代）

図版4

7．第16トレンチ 牛・馬足跡検出状況
(鎌倉時代後期)

8．第6トレンチ シカ・イノシシ足跡
検出状況(弥生～古墳時代)



9．第13トレンチ 噴砂検出状況(1510年？)

図版5

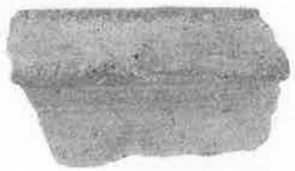
14

15

14′

15′

16



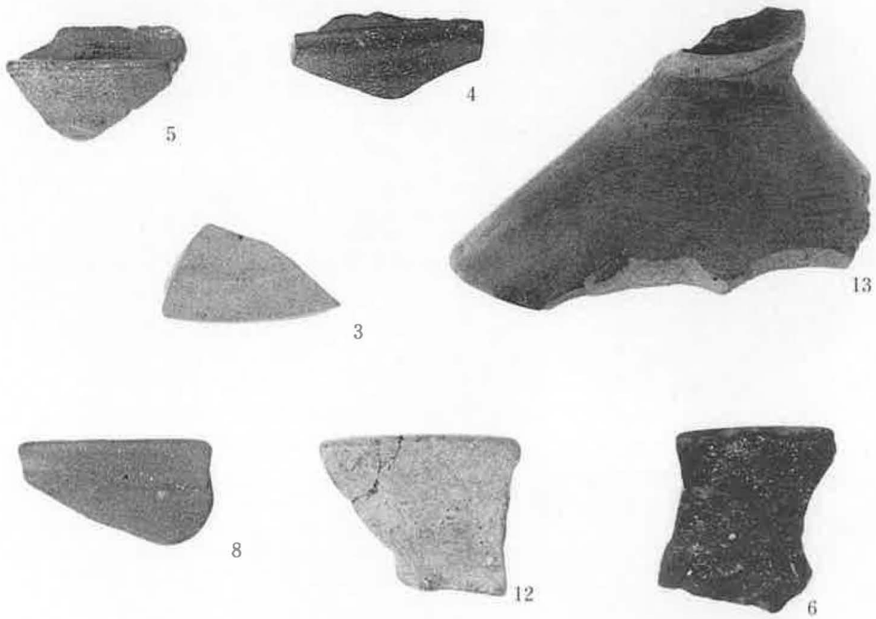
9

1

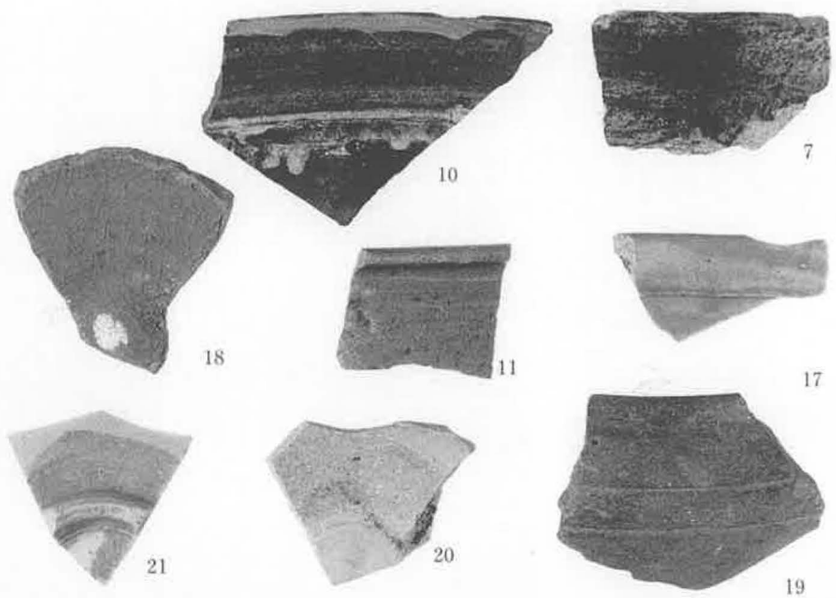
2

瓦器(1・14・15・16)　須恵器(2・9)

図版6



1．土師器(6・8・12・13)　須恵器(3・4・5)



2．土師器(19)　瓦器(7)　中国産陶器(10・11・18・20・21)　輸入磁器(17)

吉田遺跡第1次
発掘調査報告

1989年12月25日

発　行　財団法人 東大阪市文化財協会

印　刷　ドウミ印刷広研社